

「世界人類が平和でありますように」は神智の祈り言

2011年7月17日 於：神奈川集会

祈りと願い事、念力と信念の違い

前から繰り返し書いていることですが、途中から読み始めた方のために、祈りと願い事、念力と信念の違いについて簡単に書いておきましょう。

五井先生は、祈りと願い事、祈りと念力の違いについてたびたび書かれています。

願望成就と言って、「自分の欲する事物や欲する環境をイメージして強く念じれば叶えられる」という教えを宗教の祈りと同等に説いている宗教者がおりますが、そうした宗教者は神を冒瀆する邪教の宗教者と言わざるをえません。それは念力による願い事でありまして、目標が実現したとか願いが叶えられたとは言いましても、神が叶えたものではなく、自己の念力によって達成した成功にすぎません。よい目標を立て、よい願望だけを念じていたとしても、それは自己の欲望を増長し、業想念に執着させることになり、真の幸福を得ることはできないのです。わがままと言われる小我が強くなってゆくだけで、神性顕現から遠ざかるのです。

「なくてはならぬ物は与えられる」、これが真理であるのです。神は愛であり、神はあなたに必要な物をとっくにご存じなのですから、守護の神霊に自己の天命の完うを祈っていきさえすれば、自己の天命を完うするために必要な自分はすべて与えられ、整えられてゆくのです。ですから、自己の願望をイメージして「叶えられる、叶えられる」と念じる必要はないのです。少しも力まずして、少しも念じなくとも、自己の天命を完うするために必要な自分が与えられるのです。これが祈りの力であるのです。

それでは、「神様お願いします。世界人類が平和でありますように」という祈り方は、「お願いします」という言葉を使っているから願い事であるかと言うと、そうではなく、これは願う想いが祈りへと昇華された言葉であるのです。「神様お願いします」と言っても、その後が続く言葉が「世界人類が平和でありますように」という言葉である場合は、これは願い事ではなく祈りとなるのです。その後が続く言葉が「お金が欲しい、病気を治したい、こんな物が欲しい、こんな環境が欲しい」という言葉であった場合、それは願い事になります。つまり、同じ「神様お願いします」でも、目標によって、祈りになったり願い事になったりするのです。

しかし、現世利益を欲しない人はいないと思います。そこで、現世利益を欲しながら、それを単なる願い事にしないで祈りへと昇華するには、神に願い事を言った後で、「神様のみ心のままになさしめたまえ。世界人類が平和でありますように」と、「世界平和の祈

り」の中へ願い事を託してしまうことです。この方法ならば、現世利益を欲する人でも易しく「世界平和の祈り」に全託できると思います。そうしているうちに、願い事や現世利益はどうでもよくなって、神への真実の感謝が湧いてくるのです。

一方、神性を顕現するという神のみ心にかなった目標を持って、「私は神である」と唱えれば、それは祈りになるかという、これは祈りとはならず、念力になってしまうのです。人間が神性を顕現し、神我一体になるためには、それなりの順序 手段が必要でありまして、その順序 手段を経ないで、目標が実現した結果をイメージして、「私は神である、私は神である」と自力の思念で念じても、そう易々と人間は神性を顕現できないのです。人間が神性を顕現するという目標は、洋服を買ったり宝石を買ったり旅行するような簡単な目標ではないからです。神性を顕現するには、業想念の存在を浄めなくてはなりません。業想念を浄めることを考えないで、肉体人間の思念の力だけで達成できるほど甘い目標ではないのです。

ある人は、「私は神である」と思念してから、五年たっても十年たっても一向に神になる気配がありません。すると、だんだん焦ってまいりまして、周囲の人々にも「私は神である」と宣言している以上、早く神にならねばなりません。しかし、現実にはまだ神にはなれません。「想念の法則によれば神になれるはずなのに、一体なぜ私は神になれないのか、早く神になりたい」と焦燥感が出てくるのです。そうしますと、「私は神である」と宣言する言葉を力んで唱えたり大声で叫んで唱えたりと、ヒステリー状態になってゆきます。つまり、真理の言葉を宣言するという行法は、力んだ念力へと変質してしまうのです。目標が正しくても、その方法が間違っておりますと、このように念力になることがあるのです。念力で太陽は創れないように、念力で神性を顕現することはできません。念力はあくまでも業想念の力であるからです。念力には限界があるのです。

また、念力とよく似た言葉に信念がありますが、信念の言葉とは、「必ず善くなる」「世界は平和になる」というように、「成る」という言葉でありまして、「未来に成る」と信じるのですから、自然で力むことはありません。信じれば信じるほど力みが消えてゆきます。ところが、「私は既に神である」「世界は既に平和である」という真理の言葉の場合には、口でそう宣言し、紙に書いても、実際には唱えている人自身がまだ神にはなっていないし、現実の世界は平和にはなっていないのですから、言行が一致しないことを自己の本心が許さず、早く真理の言葉を現わそうと焦るわけです。そして、自己矛盾の苦しきから偽善者になって、神人のふりをするようになるのです。「『私は神である』と五年間も唱えているのに、まだ神になれないのか？」と言われることを恐れて、自己は神人のふりをする偽善者になり、同じ行法をしている弟子に対しては、「あなたは神になった」と神人の名誉を与えるわけです。神人を増やしているのではなく、「自分を偉く見せたい」という名誉欲や虚栄心を持った偽善者を増やしているにすぎないのです。

「世界平和の祈り」を守護の神霊に祈っていれば、自己の天命を完うするために必要な

事物は自然に与えられるのですし、いつしか自己の神性も顕現され、人類の神性も顕現されて、世界は平和になるのです。祈りは神の力と一体になるのですから、願い事や念力による願望成就などとは比べものにならないくらい大きな現世利益が与えられるのです。

「世界平和の祈りを祈っていれば、自分に必要なものはすべて与えられて、自分は幸福になり、世界は平和になるのだ」という信念こそ必要であるのです。

「世界平和の祈り」にお任せする他力想念波動は、守護の神霊のみ心の中で神我一体の最強の絶対力へと自動変換されるのです。「世界平和の祈り」の中へすべての想念を統一して投入する方法として、「神様お願いします」という言葉がその際に神秘的な効果を発揮するのです。それを習慣化しますと、神経細胞のルートができるように、黙っていても、すべての想念が「世界平和の祈り」の中へと自動的に吸い込まれてゆくようになるのです。

「世界平和の祈り」を祈れば、あなたに必要なすべての物質や環境は必要な時に与えられます。「世界平和の祈り」を祈っていれば、無理なくあなたは神性を顕現できるようになります。「世界平和の祈り」を祈れば、必ず世界は平和になるのです。「世界平和の祈り」の絶大な光明力を信じ、「世界は平和になる」という信念で「世界平和の祈り」を祈ってまいりましょう。

古い実相論と新しい実相論の違いを知ろう

富士山に冠雪がつもり、白銀に輝くようになってきました。「冬の富士山が好き」という人が多いのですが、その理由は何と言っても、白い雪におおわれた富士山は霊峰という雰囲気があるからでしょう。富士宮側から見た富士山は、西日が富士山に当たり、橙色から紫色へと変化してゆきます。

【古い実相論と新しい実相論】

このところ法友の皆さんと話していて気がついたことは、「実相論には二つある」ということを知らない人が多いということでした。このことは何度も詳しく書いているのですが、いまだ理解してもらえないのは、長い文章のためか、読解力がないためか、はたまた私の解説が下手なためなのでしょう。

今回は、余り何もかも話さないで、ほんの少しだけ短くお話することにしましょう。

実相論は、一つだけではなくて、古い実相論と新しい実相論とがあるのです。言いかえますと、批判のできない実相論と批判のできる実相論があるのです。前者は生長の家の実相論であり、後者は五井先生の実相論です。

「実相論は一つしかない」と思い込んでいるから、五井先生の実相論を見出せないのです。実相論は二つあるのです。「悪はない、過ちはない、不幸はない、失敗はない、病気はない」という現実の悪を無視する実相論と、「悪は消えてゆく姿、過ちは消えてゆく姿、不幸は消えてゆく姿、失敗は消えてゆく姿、病気は消えてゆく姿」と、現実の悪を暫定的

に認めつつ否定してゆく実相論の二つがあるのです。

五井先生の実相論とは、善は善と認め、悪は悪と認め、正しいことは正しい、誤りは誤り、不幸は不幸、病気は病気と認めます。そして、「消えてゆく姿」という言葉で業想念を否定してゆくのです。このような業想念否定法は、現実には矛盾しませんから正直に生きられます。現実の誤りを批判することができます。なおかつ理想にも矛盾せず、業想念への把われから自然に解放され、理想へと到達できます。

古い実相論とは、真理に片寄った真理偏重実相論であり、現実の悪を無批判に「無い」と言っているのですが、それは無視しているだけで、本当に「無い」と思っているわけではなく、思えもしないのですから、現実の悪はなくなることがないのです。新しい実相論は、悪の存在を認め、一度それを擲んで、神のみ心の中へと入れて消していただくのですから、確実に悪は消えてゆくのです。

このように、「悪は無い」と否定する実相論と、「悪は消えてゆく姿」と否定する実相論の二つがあるのです。この二つの実相論を混ぜ合わせて説いている宗教者もいますが、この二つの実相論は同じものではなくて、まったく異なった実相論であるのです。今回は「二つの実相論がある」ということだけでもいいから覚えることにしましょう。「人間は神の子である」という実相論にも二つの実相論があるのです。

【どちらが新しい実相論なのか、あなたには分かりますか？】

どちらが古い実相論であり、どちらが新しい実相論なのかを知らない人は多いようです。唯一会の人を除いて、殆どの人がこの区別がつかないのです。

「悪は現在存在するけれども、消えてゆく」という実相論と、「悪は現在存在しない」という実相論の二つのうち、一体どちらが古い実相論で、どちらが新しい実相論なのでしょう？ 一体どちらがよりすぐれた高い実相論で、どちらがより低い実相論であると思えますか？ 殆どの人はこの時点で間違えてしまうのです。

答えを申しますと、「悪は現在存在しない」という実相論は古い実相論であり、より低い不完全な実相論でありまして、「悪は現在存在するが、消えてゆく」という実相論は新しい実相論であり、より高い完全な実相論であるのです。

ところが、他の宗教の経験がなく、五井先生の宗教を初めて信仰する人は、最初から「消えてゆく姿」と教えられるものですから、「消えてゆく姿」という教えの深い意味や有難味が理解できないまま、その言葉に慣れてしまい、数年たって五井先生の教え以外の「悪はない」という新しい真理の言葉に触れますと、非常に新鮮に感じて、「悪はない」と宣言する実相論の方が、「悪は消えてゆく姿」という実相論よりも遥かに遥かに高い教えであるように錯覚を起こしてしまうのです。そして、「人間は本来、神の分霊である」と宣言する実相論よりも、「人間は今、神の分霊である」と宣言する実相論の方がよりすぐれ

た、より進んだ高い教えであるかのように思えてしまうのです。理想の姿を焦って急に現実に持ってこようとしても、理想を現すことは不可能です。高い理想であればあるほど、その理想を現実化するには長い時間が必要なのです。その時間経過を無視して理想を現実化しようとしても、それは無理であるのです。しかし、真理に把われますと、それが分からなくなるのです。

理想に片寄った実相論は、現実には行なえないのですから、高い実相論に見えて、実は低い不完全な実相論であるのです。それに対して、理想と現実の中庸に位置する「消えてゆく姿」の実相論は、理想から現実側に一段下がったのですから、低い教えであるように見えますが、実はより高い完全な実相論であるのです。「悪は無い」と否定する実相論は、新しいようでいて古い実相論であり、「悪は消えてゆく姿」と否定する実相論は古いようでいて、実は新しい実相論であるのです。

「『私は未来において神の分霊になるのである』という五井先生の実相論は、心境の低い人々のための低い実相論であり、『私は現在神の分霊である』と宣言する実相論は、真理そのものであることから、心境の高い人々のための実相論である」と説いている宗教者がいます。しかし、真実は逆でありまして、「私は現在神の分霊である」とことさらに唱えている人々は低い心境の持ち主であり、「私は未来において神の分霊になるのである」と信じている人の方がより高い心境にいる人々なのです。「人間は本来、神の分霊であって、未来には神の分霊を現わすようになる」という信念が新しい実相論であり、「人間は今、神の分霊である」という実相論の方が古いのです。

お分かりでしょうか。どちらが古い実相論で、どちらが新しい実相論なのか、区別がつくようになったでしょうか。

質疑応答 1 : 願わずして与えられ、為さずして成る祈りの道の奇蹟

【ご質問-1】 [私はお願いが一度も叶ったことがないが、森島さんの場合はどうか?]

はじめまして。私は白光真宏会の会員で大学生です。正直なところ今一つ会員としての実感がなく、情けないように感じているところです。五井先生の教えには小学四年生から触れています。会の主旨が「実益を追求する」というようなものでないことは理解しているつもりですが、種々の行事の際、「ただ一つのお願い」が叶ったことはなく、何とも心細い限りです。その結果について自分にどのような解釈を与えればよいのかが分からず、困惑しております。「努力不足だ」と言われたこともあるのですが、自分なりにやっただけのつもりです。それで無理というならば、別にお願いをしなくても結論は一緒ではないかと落胆したこともあります。自分に確信がなくては、世界に向ける目も頼りないものになるのではないのでしょうか。そんなことを考えている毎日です。私はまだ「世界平和だけが生甲斐です」とは言うことができません。森島さんには今、個人的な願望がありますか？ また、あるとすればその実現は順調と言えますか？ 初メールにも関わらず失礼ですが、

よろしければ御意見をお聞かせ下さい。

【お答え-1】〔神様に運命を任せれば、あなたに必要なものはすべて整えられる〕

「自分の願いを強くイメージしなさい。皆様の願望は叶えられます。必ず願望は成就できます。『私は成功できる』『私はやってみせる』と思いなさい。皆様の願いは五井先生に届けられました。皆様の願望は叶えられます。おめでとうございます」というような願望成就のためのイメージ法は祈りではなく、神様のみ心でもなく、念力による願望成就法と言いまして、業想念に執着させる誤った教えであるのです。

もちろん五井先生は、そのような教え方を一切説いてはおりません。むしろ五井先生は、「念力は宗教本来の祈りとは違ったもので外道であり、誤てる宗教である。祈りと念力を同等に説く宗教者は神を冒瀆するものである」と強く反対なさっているのです。たとえ念力によって願望が成就されたとしても、それは一時的に肉体感情が満足するだけでありまして、わがままと言われる小我が強くなってしまっただけなのです。ですから、念力をやっている人は共通して我が強いのが特徴なのです。

念力による成功は、神様から与えられるものではなく、自分勝手な執着念による結果でありますから、たとえば一つの物を他人と奪いあえば、そこに他人との争いが生じます。また、念が弱まれば、念の強い相手には常に敗北するようになります。そのために念を強めようと緊張し力んで、心の休まる暇がなくなって、絶えずイライラと苛立つようになってしまうのです。しかも、いずれ念力が弱まる時がきますと、何を念じても叶えられなくなってしまい、それまでの成功や安心感が一挙に崩れて、想いが千々に乱れてしまうのです。あなたのように、どんなに願望をイメージしても念じても、その願望が一つも成就せず、却ってガッカリして落胆する人もあります。

まず祈りと念力はまったく違うものであることを知らなくてはなりません。祈りとは、神様に自分の運命をすべてお任せして、神様のみ心のままになさしめていただくという方法です。自分の欲望や願望を神様のみ心の中に投げ入れて、自分の欲望や願望を無にすることであるのです。ですから、小我を強める念力とはまるで反対の生き方であるのです。神様は愛であり智慧であり、神様はあなたを生み育てて下さったのです。あなたに必要な物質や環境は、あなたがことさら願わなくても、とっくにご存じであるのです。あなたが神様に運命を任せ、神様のみ心のままに生きれば、あなたに必要なものはすべて整えられるのです。小我を棄て神様のみ心にすべてをお任せすることが祈りであるのです。

《森島さんには今、個人的な願望がありますか？ また、あるとすればその実現は順調と言えますか？》というご質問ですが、私には個人的な願望は一つもありません。私の願いは、ただ一つ「世界平和実現」です。私の心にあるのは、「神様から授けられた天命を完うせしめたまえ」という祈りだけであるのです。「神様にとって、この世に私が必要ならば私を生かしたまえ。されど、もし必要なくば、神様のみ心のままに、いつでも天に私を召したまえ」「神様のみ心のままになさしめたまえ」と、私は神様にすべてをお任せし

て生きているのです。

「できると思わなくては何事もできない。欲しいものを念じなくては何事もできない。目標を達成しようと思わなくては何事も成功できない。何も思わないで何もできるはずがない」と思っている人が多いのですが、私は神様に全託していて何も願ったりしませんが、必要なものはすべて与えられています。何も念じてはいないのに、私に必要なものはすべて与えられているのです。願うことなく与えられ、欲することなく得られ、歩かずして導かれるのです。「こうしよう、ああしよう」とか「こうなりたい、ああなりたい」というように目標実現をイメージトレーニングしているわけでもないのに、何も思わずして何も念じることなくして、私に必要なものはすべて与えられ、何も為さずして成功するのです。これが祈りの道であり、神のみ心にかなった安心立命の道であり、祈りの奇蹟なのです。

それに対して、念力の道は正しい宗教の道ではなく、神のみ心から外れた道であり、どこまで行っても不安や恐怖がなくなることはありません。念力の道の行き先は絶望と落胆の境遇が待っているだけなのです。一時的な念力による願望成就の成果に酔いしれて、祈りの道から外れてはいけません。それはちょうど競馬の馬券を買ってたまたま大儲けした人が、その喜びを忘れられず、お金をつぎこんで破産してゆくようなものです。念力の迷いの世界に踏み込んだら、そこから抜け出すことは容易ではないのです。

あなたの場合は、まず五井先生のみ教えの基本に戻って、「世界平和の祈り」一念の生き方をなさるようにお勧めいたします。念力による願望成就法はすべて捨て去って、神様に自己の運命をすべてお任せしてゆく生き方をします。神様の絶対的な力と深い愛を信じるのです。あなたは神様に愛されているのです。神様はあなたに必要な物はすべてお見通しなのです。神様はあなたを生かそうとして下さっているのです。神様はあなたを幸せへと導いて下さっているのです。その神様に自己の運命を一度すべてお任せして生きてゆくのです。神様に全託する具体的な方法が「世界平和の祈り」なのです。何も願わずとも、何も念じることなくとも、「世界平和の祈り」を祈っていさえすれば、あなたに必要な物はすべて与えられるのです。あなたが為すべきことは、ただ一つ神様に全託することであるのです。

質疑応答 2 : 祈ると神と一体になるのはなぜなのか？

【ご質問-2】 [祈り続けることでなぜ神と一体になるのか]

『続・如是我聞』に《祈りとは自分の本体が開くことである。神と一体になることである。》とあります。なぜ祈り続けることで神と一体になるのですか。

【お答え-2】 [祈り続けることでいつしか神のみ心と一つになり、神性を開顕してゆく]

神様と一体になるためにはどうしたらよいのかと昔から色々工夫されて、それが各宗教宗派の修行の形式となって今に伝わっているのですが、五井先生は、難行苦行をせずとも、

神様のみ心と一体になれば神様の力と一体になることができると教えて下さっています。

神様は、神の子である人類に対して「世界人類よ、平和であれ」と願っております。それが神様の愛のみ心です。それに対して、「世界人類が平和でありますように」と人間が祈りますと、神様の大愛のみ心と人間の人類愛の心とがピタッと一つに合致するのです。そうしますと、わずか一瞬にしても神我一体の心境になれるのです。そうした神我一体観がほんの一瞬から数秒間保てるようになり、数分間 数十分と長く保てるようになり、それだけ神我一体の時間が伸びてゆくわけです。もし1日24時間「世界人類が平和でありますように」と祈っていれば、1日24時間、その人は神我一体の境地でいることになります。そのように神様のみ心に合った祈り言を通して神様のみ心と一体化しておりますと、人間の分霊の周囲を覆っていた厚い業想念波動が次第に浄まってゆきまして、人間本来の神の分霊としての本体が自然に開いてくるのです。それはあたかも、それまで覆っていた雪が太陽の光によって溶けてゆき、雪の下に隠れていた草が芽を出し、自然に美しい花々が咲き始めるようなものです。

神と一体になる祈り言には過去から幾つもあるのですが、現在は個人と人類が同時に救われる祈り言でなくては地球滅亡の危機の時代に間に合いません。そこで五井先生は、個人と人類が同時に救われる「世界平和の祈り」を提唱されたのです。この「世界平和の祈り」を祈り続けることによって、人間の心はいつしか神さまのみ心と一つになり、神の子の神性を開顕してゆくことになるのです。

質疑問答：真理の言葉と祈り言の違いについて

【真理の言葉と祈り言の違いについて】

【ご意見-1】〔「私は神だ、世界は平和である」というのと世界平和の祈りは同一では？〕

「私は神である」という祈りと「私が神様でありますように」という祈りとどう違うのでしょうか。「世界人類が平和である」という祈りと「世界人類が平和でありますように」という祈りとどう違うのでしょうか。これは五十歩百歩じゃないんですか？ 平和なのに平和であると言いますか？ 神であるのに神であると言いますか？

【ご返答-1】〔ただ真理の言葉を唱えても、人間は神になれず、世界も平和にならない〕

なるほど。「世界人類は平和である」と「世界人類が平和でありますように」はまったく同じ意味であり、同じ祈り言であるのに、そんなことをなぜ問題にするのかとお考えになっているわけですね。しかし、もし二つが同じ意味であるならば、一つの言葉で充分なのに、なぜ二つの言葉を唱えなくてはならないのでしょうか。二つの言葉を唱える必要があるのは、その二つに違いがあるからではありませんか。

「私は神である」「世界人類が平和である」という真理そのものの言葉と、「私が神様と一つでありますように」「世界人類が平和でありますように」という守護の神霊へのお祈りの言葉とは、五十歩百歩の違いどころか、まるで意味が異なると私は思います。そこ

があなたと私の宗教観の異なる点です。

現在「世界は平和ではない」ことはあなたもお認めになることと思います。では、世界は平和ではないのに、なぜ「世界は平和である」と唱えるのですか。それでは嘘になるではありませんか。そして、まだ神性を十分に顕現していない人間が「私は神である」と唱えたら、それも嘘となるではありませんか。

自己暗示のように「私は神である」と唱えていても、その人は神にはなれませんし、「世界は平和である」と真理の言葉を唱えていても、世界は平和にはならないと私は思います。しかし、それができるとあなたが思っているならば、私はあなたの行為を止めることはいたしません。

あなたの言う通り、実際に世界が平和であるならば、「世界は平和である」とことさら唱える必要はありません。それをことさら唱えるということは、口先では「世界は平和である」と言っても、心の中では「今は世界は平和ではないのだ」と思っているからです。また、「私は神である」と何回も繰り返し唱えている人は、「私はまだ神になっていない」と心の中で思っている人なのです。

世界が平和であるならば、ことさらに「世界は平和である」と繰り返し唱える必要はありませんし、その人が既に神であるならば、ことさらに「私は神である」と唱えることはしないものです。それをことさらに唱えていることは、「世界は平和ではない、私は神ではない」という自分の本音の想いを発表しているようなものです。口先でどんなに立派な真理の言葉を唱えていようと、心の中では「世界は平和ではない、私は神ではない」と思っているのですから、潜在意識はその人の本音を受け入れて、世界は平和になることはないし、その人が神になることもないのです。

【ご意見-2】 [理屈ばかり言わず、五井先生が何を伝えたかったかを説くべき]

だから、そんなことを説くよりも、五井先生のことだけ考えて、五井先生が何を伝えたかったかを説くべきではないでしょうか？

【ご返答-2】 [五井先生が伝えたかったことを私がいま説いている]

五井先生が伝えたかったことを、私は今説いているのです。

五井先生が伝えたかったことは、「我は神なり」「私は神である」「世界は平和である」という真理の言葉を唱えても、人間は神性を現わすことは到底不可能であり、世界を平和にすることはできないのだ、「世界平和の祈り」に全託してこそ、人間は真に救われ、世界は平和になるのだ、という教えです。

【ご意見-3】 [祈りの言葉ではない、心が大事]

人がどう祈ろうと、その人の心がそう動いているのです。

【ご返答-3】〔宗教観の異なる者同士が無理にいっしょになる必要はない、何事も自由に〕

私は誤てる宗教や誤てる行じ方について批判はしておりますが、その人の自由を縛ることはいたしません。私の意見に共鳴した人たちが私と一緒に祈って下さればよいので、宗教観の異なる人に自分の意見を強制することはいたしません。宗教はその人その人の自由になさればよいのです。私は皆さんに「こんな生き方もありますよ」と選択肢を提供しているだけです。

【ご意見-4】〔あなたが変な自説に固執するから罵られるのでは？〕

森島さんが下手に変な自分の持っている真理を書き込むから、ダイバダッタだとかキツネ憑きだなんて言われてしまうんじゃないでしょうか？

【ご返答-4】〔私の教えは五井先生と本質的には同じで、今は多くの人に認められている〕

「ダイバダッタ」とか「キツネ憑き」とたまに言われることはありますが、釈尊やイエスや五井先生のような聖者でも、業想念で心の曇った人からはそう言われたことがあります。言われる方が悪い場合もありますが、言う方が誤っている場合もあるものです。そういう人に対して、私は「あの人はまだ幼いなあ」と笑って、その人の天命の完うをお祈りしております。私の教えは私独自の新しい表現がありますが、本質的に五井先生と同じ教えであり、それは今では多くの人々が認めて下さっています。次第に私の実体が多くの人々に明らかになるにつれて、そのように言われることもなくなることでしょう。

【「世界人類が平和でありますように」は神智の祈り言】

【ご意見-5】〔無理せず世界平和を祈れるのであれば多少の言葉の違いは問題にならない〕

確か五井先生の講話のテープに、「世界人類よ平和であれ」と「世界人類は平和でありますように」というのは同じだ、というお話しがありました。確かその時に、人間は神から分かれたものであり、それは神そのものでもあるから、その心境になれる人は「……あれ」と言ってもいいが、まだそうでない人は「……ありますように」の方が祈りやすいでしょう、みたいなことを五井先生はお話しされていたと思います。

思うに、五井先生は信者の方たちを指導する際、「無理をさせない」ということを常に配慮されていたのではないのでしょうか。つまり、神様のような言動ができず、しかもそれを自覚している人たちに「世界人類よ平和であれ」という神の立場からの祈りをさせると、祈ることへの恥じらいや自己嫌悪といった気持ちを生じさせ、信仰に対して疑問を生じさせると判断されていたのだと思うのです。私は、「……ありますように」という言葉の趣旨には、こうした五井先生のお考えが反映されているのだと考えています。これを反対解釈すれば、無理せず世界の平和を祈ることができるのであれば多少の言葉の違いは問題にならないと思うのです。ですから、こうした五井先生のご指導の際の趣旨に沿っていれば、先の質問者が指摘されている程度の祈りの言葉の違いは問題にならないと思うのですが、

森島さんのお考えをお聞かせ下さい。

【ご返答-6】〔神様と人間の立場を混同し、現実を無視した不自然な祈りは叶わない〕

よいご質問ですね。「世界人類よ、平和であれ」という祈りは大神様の祈りなのです。大神様（宇宙神）は「世界人類よ、平和であれ」と祈っているのです。私も五井先生からそのお話を伺って、大神様になった気分を味わいたくて、しばらくの間、「世界人類よ、平和であれ…」と繰り返し祈ったことがありました。「『世界人類が平和でありますように』と祈るよりも、ひょっとして高い心境になれるかも知れないぞ」とひそかに期待して祈っていたのですが、しかし、どうしても長続きできないのです。長続きできないのは、後で分かりましたが、これは不自然だからなんです。大神様が「世界人類よ、平和であれ」と祈るのは自然ですが、肉体を持った神の子である私たちは、「世界人類が平和でありますように」と大神様に対してお願いする形で祈るのが、やはり自然なのです。それで大神様のみ心と私たちの心が一体になるのです。

あなたの《無理せず、世界の平和を祈ることができるのであれば、多少の言葉の違いは問題にならないと思うのです》というご意見には頷けますが、かといって、《先の質問者が指摘されている程度の祈りの言葉の違いは問題にならないと思うのです》というご意見は頷けません。この方の書いている言葉は「世界は平和である」という真理の言葉でありまして、大神様の祈りとはまた違った意味であるのです。「世界は平和である」という言葉も、本当のことを言えば祈りであるのです。祈りではあるのですけれど、現在の地球人類が祈るにはまだ早すぎるのです。それは真実に地球に平和が実現された時に宣言されるべき祈りであるのです。軍がクーデターを起こし、野蛮にも国の議事堂で銃を乱射して政権を倒したり、外国人の人質をとって自分の主張を通そうというような卑劣な軍事勢力が横行したり、或は「日本を守るには核武装しかないのだ」と発言する国会議員がいるような現状では、とてもとても「世界は平和である」とは宣言できないではありませんか。それでは嘘になります。

現実には世界は平和ではありません。そうした現実から逃避した、真理に把われ理想に把われた、肉体の頭で考えた観念だけの観念論者の言うことなどは何の役にも立ちません。現実に対して嘘をつく偽善宗教者の発言に皆さんは惑わされてはいけません。もし私の言うことが納得できなかつたら、お好きなようにやってみたらよいのです。「世界は平和である」という宣言による平和運動をやってごらんください。そんなことをやっても、できっこないから。それは現実を無視しているからです。現実を無視した理想に片寄った平和運動では民衆の支持が得られません。独りよがりの平和運動で終わってしまいます。現実の事態をしっかりと直視して、なおかつ理想へと前進できる自然な祈り言が、「世界人類が平和でありますように」という祈り言であるのです。

しかし、私の言うことが分からない人は、気がすむまで実際にやってみるといいのです。

「我は神なり」でもいい、「人は神である」「人類は神である」「世界は平和である」でもいい、何でもいいから、やっごらんないさい。「世界人類が平和でありますように」よりも勝る祈り言はないということがいつか分かるから。だから、私は批判はしているけれど、皆さんに自由にやらせることにしているのです。

幼い子供と同じで、「これは危ないから、しちゃいけないよ」と言っても、幼児はわがままだから大人の言うことを聞きません。自分でやりたがるのです。自分でやってみて、失敗すると納得する。ちょっとケガをすると、「ああ、これは危険だな」と初めて納得する。だから、大ケガをさせない程度に自由にやらせてみるんです。それでしばらくたってから、「自分の考えた方法でやってみましたが、どうしてもできませんでした。助けて下さい」と泣きついてきたら改めて教えてあげようと思っているのです。その時点で教えれば、私の言うことを素直に聞く態度ができているから、よく分かるのです。ですから、最初から「世界平和の祈り」にスーッと素直に入って右顧左眄しない人は実に幸せな人であるのです。